

前坊の仮想

—表現方法としての源氏物語年立・続—

瀬戸 宏太

源氏物語の注釈に際しては、主人公・光源氏の個々の恋物語を、年立と呼ばれる、一つの時間軸に連なるものとして把握しようとすることが多い。そこにこの物語世界の厚みが感じ取られるからだ¹が、しかし他方、そのような把握が、時として物語の中にある年齢叙述と、矛盾して見えることがあるのも事実である。

前稿で私は、そうした事例の一つとして三十七歳と記される紫上の年齢を取り上げ、それが作者の思い違いや誤写によるものなのではなく、彼女が幼女であった時間を、物語にとって重々しい意味を持つ時間として提示しなおそうとする、一つの表現方法だったのではないかと考察してみた。²それは、若紫巻の時点で彼女を十歳と読むことを誤りとするためではなく、むしろ十歳と読み取られることに、積極的な意味を見出そうとすることでもあったつもりである。

言い換えるなら、この物語には、年立を作ることによつ

て明らかになるような設定があるのだとして、その設定を読み取らせることだけを目的とするのとは違う表現があるのではないか。設定を読み解くことが正解なのではなく、その設定を誤読することを許容することで可能になっている表現があるのではないか。本稿ではそうした問題意識から、年立と年齢表記の乖離を、この物語の積極的な表現方法として捉え返してみたいと思う。

一 六条御息所の年齢

源氏物語の中で記される年齢と、源氏物語の叙述に従って作成してみた年立との間に、もっとも大きな乖離を感じさせるものの一つに、賢木巻における六条御息所の描写があることは、大方の同意を得られるのではないかと思う。

御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の

限りなき筋に思し心ざしていつきたてまつりたまひし
ありさま変りて、末の世に内裏を見たまふにも、もの
のみ尽きせずあはれに思さる。十六にて故宮に参りた
まひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、
今日また九重を見たまひける。

(賢木 2 九三頁)²

年立によれば、この時の光源氏は二十三歳。六条御息所
が三十歳というなら年齢差は七歳の筈である。だが、だと
すると、前坊のもとに入内したという、御息所十六歳の時
点で源氏は九歳。この時点での春宮が彼の兄宮・朱雀であつ
たことは、その立坊に気落ちした源氏の祖母の死が、彼の
六歳の時であつたと桐壺巻に明示されていて動かないか
ら、おのずと矛盾というか、噛み合わないものが感じられ
るのである。

これに対する源氏物語研究の、中でも年立研究の立場は、
大雑把に言つて二つの方向性に分かれる。一つは、その矛
盾を解決すること自体を作品の解釈としようとす立場で
あり、もう一つは、作者自身の何らかの思い違いを想定し、
本文を正していこうとする立場である。³ 年立と一定の距離
を置こうとするのも、書かれていることの一部を意識的に
遠ざけているという意味では、後者の立場に近いと言える

だろう。⁵

今、物語の年齢表記に意識的な表現方法を見出そうとし
ている本稿では、おのずから後者の在り方に否定的な目を
向けることになる。ただ、そのような検討がなされてきた
のは、前者の立場からの優れた研究成果の数々が、それ
も作品世界の解釈として、窮屈な印象を与えてきたからで
あろうとは想像できるとも思う。

たとえば「故前坊」という呼称が存命中の退位を想起さ
せるとして、⁶ その退位した宮に大臣家の姫君がわざわざ入
内することの意味は、それだけでは、あまり物語的な興味
を引くものと感じられないのではないか。それよりは、彼
が皇太子（正確には皇太弟と言うべきか）の地位にあつた
時に入内したと考える方が、ここでの六条御息所の感慨に
ふさわしいし、素直な読み方と言ふべきであろう。むしろ、
年立に縛られて解釈の幅を狭められたくないという気持ち
はよくわかる。年立と距離を置こうとするのも、年立に修
正を求めるのも、要するに、この場面の表現の重さを受け
止めようとすればこそであつて、その限りでは、本稿の感
じ方もそちらに近いのである。

ただ、考えてみたいのは、そのために一時的であれ年立
を手放さざるをえないのだとしたら、それは、そのように
表現として仕向けられているということなのではないかと

いうことだ。年立によって明かされるような設定が作品世界にあったとして、物語が読ませたいのは、その設定自体ではあるまい。そもそも前から順番に読んでくるとするならば、この時点で読者はまだ年立を与えられていないと言すべきである。与えられていないから物語の中にも年立を設定されてないと考えのではなく、年立を与えていないことで逆に、設定とは別に読み取らせようとしているものがあるのではないか。そこに意識的に踏み込んでみたいと思うのである。

年立が最終的には正しいと考えるならば、年立を離れることは誤読を目指すということでもある。けれども、年立を作らせることが物語の目的ではないとしたら、その誤読の方が物語の表現に寄り添うことになる可能性もあるだろう。比喩的に言うならば、年立という物語の設定通りの大通りが、途中で工事中の片側通行になって渋滞している時、その渋滞から逃れるための迂回路も用意されているとは考えられないか。片側通行に文句を言ったり渋滞を我慢したりするのでなく、その迂回路を探してみたいと考えるのである。

あくまで迂回であるから、元の大通りに戻ってくることは目指す。予感的に言っておくなら、戻ってくるタイミンは、光源氏の年齢が明かされる藤裏葉巻あたりということ

となるだろう。途中、道に迷わないように、冷泉帝の年齢が明かされる滯標巻や、藤壺宮の没年齢が分かる薄雲巻あたりも視界に入れておく必要があるかもしれない。ともあれ、そうと決めたところから、まずは六条御息所が入内した十六歳の時の光源氏の年齢を数え直してみることにした。

年立を与えられていないと言っても、物語が語ってきた時間の経過までなかったことには出来ない。少なくとも、年立に戻ってくることを前提にしているのだから、熱心な読者が指折り年齢を数える程度のこととは否定すべきではないだろう。したがって、この賢木巻から十四年を遡ろうとするならば、年立で空白となっている五年間（桐壺巻と帚木巻の間の四年間と、花宴巻と葵巻との間の一年間）だけが、無視出来る時間ということになる。年立上では光源氏九歳の時の六条御息所の入内は、それを離れることによつて光源氏四歳の時にまで遡ることが出来るということだ。

では、光源氏四歳の時ならば、六条御息所の入内は自然なこととして受け入れられるか。実は、それでも微妙な問題が残る。年立によれば、源氏四歳の春に朱雀の立坊が実現しているからだ。これではやはり、御息所の入内は前坊の退位後となつてしまい、むしろ、退位した直後では、かえって不自然な印象を与えることになるだろう。

ここまで考えてきた時点で、おそらく、この読み方があくまで誤読であり、物語がそういう設定をしていたわけではないことは、ほぼ確実なのだろうと思う。ただし逆に言うと、それを誤読として許さない表現がなされているわけでもないことには、注目できるのであるまいか。

若き人々、悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことをそのかしきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらむもいと人聞きうかるべし、また、見たてまつらでしほあらむは、いとうしろめたう思ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせたまつりたまはぬなりけり。

(桐壺Ⅰ 三三一—三三三頁)

月日経て若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならずきよらにおよすけたまへれば、いとゆゆしう思したり。

明くる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また、世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく思

し憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかり思したれど限りこそありけれ」と世人も聞こえ、女御も御心落ちるたまひぬ。

(桐壺Ⅰ 三七頁)

光源氏四歳の時に立坊と読めるのは、桐壺更衣の死が源氏三歳の時のことであり、これに対し「あくる年」という表現があるからだ。源氏四歳という数字が明記されているわけではない。もちろん素直に読めば、靑負命婦が桐壺更衣の母親を見舞った後の描写に、周辺が「とく参りたまはむことをそのかしきこゆれど」とあって、母・更衣の死を理由として宮中を退出した光源氏が再び参内することの障害は、既になくなっていることが窺われる。「月日経て、若宮参りたまひぬ」という参内は、その年内だったと考えるのが普通だろう。

けれども他方、光源氏の祖母の方は「すがすがともえ参らせたまつりたまはぬなりけり」とあって、それを引き伸ばしていることも明らかである。年をまたいだとまで読みとれる表現は見当たらないが、服喪の期間が一年間だと考えれば、そのぐらい参内を遅らせたと考える余地は残っている。諸注に指摘するように、物語が書かれた時代において、この年齢で忌みのために宮中を離れることが既に

行われていなかったことを考え合わせるなら、現実の側から数ヶ月で参内するのが当然という、常識的な理解も成り立ちにくかったと言つてよからう。

しかも、朱雀の立坊によつて気落ちした祖母の死は、光源氏六歳の時とされる。気落ちしてから死に至るまでの期間に標準的な日数が定められる筈もないが、光源氏四歳の春からだと二年間が経過した計算になる。それよりは五歳の春からの一年余りで死に至つたと読む方が、落胆の大きさが感じられるというものだろう。六条御息所の入内を、前坊が春宮の地位にあつた時と読める余地も、十分に残つているというべきではあるまいか。

繰り返すようだが、これは誤説である。正しい読み方として主張しているわけではない。ただ、そのような誤説を許容する、あるいはそうした誤説を誘発するような叙述であることを確認しておきたいのである。当然、すべての読者がそう読む筈だとも思わないが、熱心な読者が指折り数えながら六条御息所の入内の時期を特定しようとしてきた場合、逆に物語の背景を深読みすることになる可能性も出てきそうに思う。例えば、次のような具合にである。

「故前坊」が存命中の退位を感じさせる表現であることは確かだろうが、それが廢太子というような、血生臭い政争を思わせるかという点、おそらくそうはならない。何よ

り、桐壺院の前坊に対する思いの寄せ方が、そうした政争に巻き込まれた人物に対するものとは感じられないからである。むしろ、彼が春宮の座を辞すことは既定路線だつたと考える方が自然だろう。

桐壺帝が即位する際にどういふ事情があつたかは定かでないが、まだ朱雀が幼少の時の即位であつたことは動かない。右大臣をはじめ、桐壺帝を支持する勢力からすれば、その即位はやや早過ぎるタイムリングではなかった。少なくとも、朱雀はまだ春宮に即くべき年齢ではない。他方、先帝と后との間には、藤壺宮の兄に当たる皇子（後の兵部卿宮＝式部卿宮）がいる。とすると、これが春宮となつたのを避けるために、いわば中継ぎとして皇太弟の座にすることを避けるために、いわば中継ぎとして皇太弟の座に就いたのが前坊であつたということにならないか。無説論、それを主導したのは右大臣だつたらうし、左大臣も協力したのかもしれない。彼らにはそれを成し遂げるだけの絶対の力があつたし、さればこそ、しかるべき時がくれば、春宮の座は右大臣の娘・弘徽殿の女御腹の皇子に譲られることになつていた。そんな感じだ。

ところが小さな計算違いが起こる。当の桐壺帝が桐壺更衣への愛に溺れ、彼女を失うと今度は意気消沈して政治への意欲も減退してしまう。先に掲げた光源氏参内の場面の直前には、次のような描写がなされている。

ものなどもきこしめさず、朝餉のけしきばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いとほるかに思しめしたれば、陪膳にさぶらふかぎりは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、「いとわりなきわざかな」と言ひあはせつつ嘆く。「さるべき契りこそはおはしませしめ。それらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御事にふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今、はた、かく世の中のことをも思ほし棄てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と、他の朝廷の例まつでひき出で、ささめき嘆きけり。

(桐壺一 三六一—三七頁)

磐石に見えた左大臣・右大臣の体制であつても、ここで桐壺帝がそのまま退位するようになつてしまつたら、いきなり朱雀を帝位につけるわけにはいかない。皇太子が帝となり、その空いた春宮の座に朱雀が即くという順番になるだろう。遠からず退位を迫ることになるとしても、在位中に後継の皇子が生まれたりすると、話がややこしくなる。逆に考えると、六条御息所の父大臣は、そうなることに賭けて娘を入内させたのではないか。かつて右大臣も、

桐壺帝が春宮であるうちに娘を入内させていた。それと同じ狙いで、皇太子に娘を入内させることで政権に関わりうとする思惑があつたのではないか。

もう一度、繰り返しておくが、これは誤読である。賢木巻の六条御息所の年齢だけから、ここまでの話を読み取ろうとすれば、それが妄想に近いことはよくわかつている。そもそも、先へ向かつて物語を読み進めようとするのが読者というものだ。ここで立ち止まつて、過去の物語を読み取ろうとするのは、熱心というよりは酔狂な読者と言つた方が良いかもしれない。

また、六条御息所が十四年前に入内したという事実は、過去に向かつて時計の針を回すことを可能にはしても、この先記憶され続けていくことを求められるような性質のものではない。だからこの叙述は一過的なものと受け止められて、顧みられることが少なかったのでもあろう。つまり、考えてきたような誤読が可能だとしても、それは言わば刹那の誤読でしかない。だが、さればこそ、ここで一つの指摘をしておきたい。この十四年前という過去を、未来に向かつて積み重ねる時間に置き換える存在がいる。

齋宮は十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてたてまつりたまへる

ぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにてしほたれさせたまひぬ。

(賢木2 九三頁)

齋宮である。ここで十四歳という、前坊と御息所の間の娘・齋宮の年齢が語られているのは、ここであえて試みてきた利那の誤読を、かろうじて先送りする仕掛けになってはいないだろうか。出生は、六条御息所十七歳の時。朱雀の立坊を光源氏五歳の時と誤読し続けるならば、それと同年。この点を意識して、もうしばらく物語を読み進めていくことにしたい。

二 利那の誤読の連鎖

六条御息所の伊勢下向の後、賢木巻はおよそ二年間の経緯を語っていく。それは新年を迎えたという叙述で数えることが出来るといった、ぼんやりしたのではなく、その年のうちに桐壺院の崩御があり、翌年の一周忌の法華八講の場での藤壺宮の落飾があり、それと表裏して明くる年の人事で不遇をかこった光源氏が、敵方とも言うべき右大臣家の朧月夜のもとで逢瀬を重ねることが語られるという、

かなり印象的でわかりやすいものである。

賢木巻と須磨巻との繋がりには、間に花散里巻をはさむこともあって自明とは言えないが、それでも源氏の須磨への出立が三月と明記されるのに対し、その発端となった朧月夜との逢瀬の発覚が、夏の雷鳴とともにあったことを思い起こすなら、ここにおよそ一年の経過があることは、自然と看取されることと云えるのではないかと思う。そして、その須磨巻では、八月十五夜の印象的な叙述を経た後、年が明けた三月の祓えに続いて暴風雨が起こる。

つまり、賢木巻での六条御息所の描写以降、光源氏が明石に到着するまでに四年が経過していることは、かなりわかりやすく描かれていると言えるのではないだろうか。この時、十四歳で登場してきた齋宮が十八歳になっていることは、ことさらに数えてみなくても、きつかけさえあれば簡単に算出できそうに思えるのだが、どうだろうか。

もとより、ここまでの叙述で、この四年間で齋宮が十八歳になっていることを思い出す読者は、決して多くはない。だが、そう考えてきた時、ここで登場してくる明石君が、入道によって源氏に紹介されるくだりは、おのずと目を引くのではないかと思われる。

いととり申しがたきことなれど、わが君、かうおほ

えなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏の憐れがおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにやとなん思うたまふる。そのゆゑは、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童いときなうはべりしより思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとにならずかの御社に参ることなむはべの。昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を高き本意かなへたまへとなん念じはべる。

(明石2 二四四―二四五頁)

「この十八年になりはべりぬ」。この言い方が明石君が十八歳になることを思わせる表現であることは動かないだろう。無論、これも年立の側からは問題のある表現ではある。若紫巻で良清によって「代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず」(若紫1 二〇三頁)と紹介されているのが、既に結婚適齢期であることを思わせるのに対し、この年齢を信じるなら、若紫巻の時点では九歳ということになってしまふからである。

だが、年立をひとまず離れた立場からは、花宴巻と葵巻

との間の一年はまだ見えていないので、若紫巻の時点まで指折り数えてみても十歳。この巻で光源氏に見染められた「十ばかり」の紫上と同じ年頃ということになるし、そもそも良清の話の中で年齢が明示されていたわけではない。実際にその場に居合わせたのでもない伝聞の話なのだから、「代々の」という言い方が大袈裟だった可能性もあるわけで、この段階で明石君の年齢が十八歳に見えることを即座に不審としなければならぬ理由は、あまり大きくないと言っておいて良いのではないだろうか。

そして、そうだとすると、この後の明石君との逢瀬で、光源氏が六条御息所との類似を見出しているのは意外に意味深長なことに感じられてくるのではないかと思う。

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。何心もなくうちとけてみたりけるを、かうものおぼえぬに、いとわりなくて、近かりける曹司の内に入りて、いかで固めけるにかいと強きを、しひてもおし立ちたまはぬさまなり。

(明石2 二五七頁)

十八歳という年齢を信じるなら、明石君は斎宮とほぼ同じ年頃ということになる。六条御息所に明石君が似ている

ということはおのずとその娘の姿も連想させることになるのではないか。

利那の誤読は、その斎宮が生まれたのが、おそらく父・前坊の皇太弟退位と近い時期であることを暗示していた。それは六条御息所の父大臣の賭けが負けに終わろうとしていた時期でもある。斎宮と明石君とを重ねてみると、そのちようど同じ時期に、明石入道が「住吉の神を頼みはじめ」たということになる。

明石入道もまた「大臣の後」(若紫Ⅰ 二〇二頁)であった。六条御息所の父大臣と系図上のつながりがあるかどうかはわからないが、この物語の中で、左大臣と右大臣とが桐壺帝の治世下で不動の重鎮であることを思えば、その他の大臣たちの血脈は、そこから遠ざけられ、また遠ざかるうとしたという文脈が明滅している。無論、これも利那の誤読である。だが、若紫巻の時点で紫上と明石君が共に十歳だと数えられるとすれば、春宮位から遠ざけられた紫上の父宮までも合わせて、その娘たちの生まれたのが、前坊の退位と同じ時期のこととして集中してくるかのような印象を醸し出しているとは言えないだろうか。そして、それは、光源氏の立坊が断念された時と重なるという誤読をも招き寄せる。

前稿において、私は若紫巻での紫上が、設定上は八歳な

のではないかと考察した。また、この時点の明石君を十八歳とするのが疑わしいことも既に述べた。だから、この三人の女君たちの年齢は、本当はすべて異なる。しかも年齢を動かすことの出来ない斎宮の出生は、年立上、光源氏の立坊断念とはまったく関係がない。つまり、物語の構造は、この四者の人生が、過去に遡ることによつては、いささかも連携しないものであることを明確に示している。

それなのに物語は、その構造を読者に知らせることよりも、利那の誤読を連鎖させることで、それとは逆の印象を与えることの方に熱心であるように感じられる。ここに物語の意図があるのではないか。そう考えたいのである。

そう。暴風雨に伴って出現した桐壺院のことを考えている。彼が帝位にあった時の回想が、ここに重なるって感じられるのではないかということだ。

「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや棄てはべりなまし」と聞こえたまへば、「いとあるまじきこと。これは、ただいささかなる物の報いなり。

我は位に在りし時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見

るにたへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるに
よちなむ急ぎ上りぬる」とて立ち去りたまひぬ。

(明石2 二二九頁)

その言によれば、桐壺帝は在位中「過つこと」はなかつたけれど、「おのづから犯し」があり、「その罪」を償っていたのだという。それが具体的にどのような犯しで、どのような罪であったのかは、無論わからない。ただ、やがて光源氏の目を通して明石君と六条御息所とが重ね合わせられ、桐壺帝の治世から弾き出された大臣たちの末裔という利那の誤読が連鎖的に明滅する時、桐壺帝が主体的に導いたことではなかった分、それが「おのづから」という形容にふさわしい犯しの正体であるかのような印象が滲み出てくるとは感じられないだろうか。

しかも、光源氏が明石へと導かれていくことは、桐壺院が罪を終えたことと連動しているようでもある。だとすれば、光源氏が明石君と結ばれ、栄華への道へ回帰していくことは、その桐壺院の犯しの裏返しだという理解も可能となる。明石君ばかりではない。齋宮の後見となることも、紫上という理想の正妻を得ることも、光源氏の栄華の全体が、桐壺院の罪を発条として正当化されるかのような構図。

利那の誤読は、須磨に沈淪した光源氏の再生を後押しするかのように、連鎖して物語の背後の文脈を作っていくと感じられるのである。

いや。間違わないでおこう。誤読はあくまで誤読である。だから、そのような読み方をしなければいけないと言うつもりはない。ただ、そのような利那の誤読の連鎖によって、重要な問題が棚上げされたままにされようとしているとは言えるのではないか。光源氏を襲っていた「いささかなる物の報い」の正体である。

そもそも、この物語の読者にとって、懸案事項は桐壺院の罪ではなく、主人公・光源氏の罪であるべきであろう。「犯せる罪のそれとなければ」(須磨2 二二七頁)。須磨で彼を襲った暴風雨は、この彼の歌の一節が引き金になっているように見える。なのに、それは「いささかなる物の報い」と捉えられて、それだけで片付いてしまったということなのか。おそらく、そうではあるまい。

須磨への流離は、直接的には朧月夜との一件をきっかけとしている。それは確かに「犯せる罪」という程のことではなかったかもしれないし、桐壺院が朱雀帝の夢枕に立つことで解決する程度のものであった。だが、そのことをもって、藤壺との密通も許されたと言えるのか。あるいは、許されたから、彼は栄華への途に戻ってきたのだと言える

のか。

本来ならば、光源氏の罪として問われるべき問題が、利那の誤読によって桐壺院の罪の問題にすり替えられている。すり替えることで光源氏の栄華への道程が保証されている。六条御息所の娘の斎宮を後見して今上のお后にするこゝとが、明石君の産んだ姫君を次の帝のお后にすることが、紫上を王宮に比肩する六条院の正妻として遇することが、桐壺帝の治世下で涙を飲むしかなかった父親たちの無念をほらすことであるかのように実現していくからだ。だが、逆に言うと、それは彼を彼自身の罪からは解放していかないということではなかったか。

要点は、ここにあると思う。

少なくとも、光源氏が栄華への階梯を登っていくことで、彼と罪を共有する藤壺宮と、その罪の結果として生まれた冷泉帝とは、逆に苦悩を背負わされていると見える。その苦悩の在り方にも注目すべきかもしれないが、ここでは象徴的なこととして、その藤壺宮と冷泉帝の年齢表記によって、考えてきたような利那の誤読の連鎖が断ち切られていくことに、注意を促しておきたい。

あくる年の二月に、春宮の御元服のことあり。十一
| になりたまへど、ほどより大きに、おとなしうきよら

にて、ただ源氏の大納言の御顔を二つにうつしたらむ
やうに見えたまふ。

(濡標2 二八一—二八二頁)

濡標巻で語られる、冷泉十一歳。これは年立と矛盾しない年齢表記の一つである。逆に言うと、冷泉誕生の紅葉賀巻から濡標巻までの間のどこかに、空白の一年を認めないと成り立たない表現だということだ。念のために言うとおくと、この一年を認めてもなお、桐壺巻の年齢表記はかろうじて成り立つ。光源氏六歳の春に朱雀が立坊し、その年の内に祖母が亡くなったとすれば書かれている年齢の説明はつくからだ。ただ、そのためには、彼の参内を五歳の時としなければならず、無理が大きい。一方で誤読を誘発させておきながら、その誤読によって回避されている問題を決して手放したわけではないからこそ、それと関わりの深い人物を語る時、物語は、おのずと正しい設定を垣間見させようとしているのではないか。

藤壺宮についても見ておく。

三十七にぞおはしましける。されど、いと若く盛り
におはしますさまを、惜しく悲しと見たてまつらせた
まふ。

薄雲巻で明かされる、藤壺宮三十七歳。彼女の入内が光源氏何歳の時なのかは厳密にはわからないから、これもただちに誤読を正す決め手になるとまではいかない。ただし、年立で確認される、桐壺巻と帚木巻との間の四年間の空白を無視したままにすると、藤壺宮の入内の時の年齢は四歳引き上がってしまうことになる。それで不自然のないところを藤壺宮の入内の年と考えようとすると、かなり窮屈な解釈を施さざるをえなくなる。それよりも、桐壺巻と帚木巻との間には一定の空白があったと考える方が自然であるから、このあたりまで来ると、六条御息所の前坊への入内が、その皇太弟在位中だったと見るのはかなり難しくなっていると言えるだろう。次の朝顔巻で光源氏の夢枕に立った藤壺宮の姿も、かように誤読の連鎖によって回避されていた光源氏の罪の問題が、改めて手練り寄せられつつあることと表裏の関係にあると思う。

もっとも、その割には光源氏の苦悩は描かれない。苦悩どころか、罪の意識すらほとんど描かれなくなっていく。それは何故なのか。この問いに性急に答えることは難しい。ただ、罪の問題を解決しないまま栄華にたどり着かせるということが、罪と栄華とを不即不離の関係と位置付けるこ

とだと見做すことは出来ようか。そのあたりをもう少しだけ考える手掛かりとして、刹那の誤読の連鎖から、どう年立の文脈に戻っていくことが出来るのかを、最後に考えてみることにしたい。

三年立との共鳴

源氏物語の年立の作成が可能になるのは、藤裏葉巻に「明けむ年四十になりたまふ、御賀のこと」（藤裏葉3 四五四頁）とあって、この時点で光源氏が三十九歳であることが明かされたところからである。ただ、源氏物語を読み解こうとする立場からは、そこから逆算して光源氏の年齢を確定させていく動機があるとしても、それが一般的な読者にも求められているとは、あまり思えない。これ自体はあくまでも光源氏の栄華の一つの区切りとして、四十賀が視界に入ってきたというに過ぎないだろう。

では、年立を殊更に意識しないような読者にとって、光源氏が四十歳になろうとしていることは、これまで物語が語ってきたことと無縁かと言うと、そうも言えないように思う。何故なら、続く若菜上巻において、それが彼の息・夕霧と対比させるように語られているからである。

二十にもまだわづかなるほどなれど、いとよくととのひすぐして、容貌も盛りりにほひて、いみじくきよらなるを、御目にとどめてうちまもらせたまひつつ、このもてわづらはせたまふ姫宮の御後見にこれをやなど、人知れず思しよりけり。

(若菜上4 二四頁)

朱雀院から見た夕霧の様子である。二十歳前だが既に中納言であり、懸案の女三宮の婿にもふさわしいと見ている。そして、その朱雀院によって、若かりし日の光源氏のごが語られていく。

宮の内に生ひ出でて、帝王の限りなくかなしきものにしたまひ、さばかり撫でかしづき、身にかへて思したりしかど、心のままにも驕らず、卑下して、二十がうちには、納言にもならずなりにきかし。一つあまりてや、宰相にて大将かけたまへりけむ。

(若菜上4 二六頁)

四十賀を翌年にひかえた光源氏は、この時点でも三十九歳。大将になったのが二十一歳の時ということは、そこから十八年が経過していることになる。他方、夕霧が二十歳

前ということ、彼が生まれたのが光源氏が大将になってからであることは、簡単な引き算だけで見当のつくことである。

もとより熱心な読者にとっては、多様な恋物語の主人公としての光源氏には中将の印象が濃厚だったろうし、賀宴の際に脚光を浴びる光源氏は「源氏中将は、青海波をぞ舞ひたまひける」(紅葉賀1 三一一頁)、「宰相中将、春といふ文字賜はれりとのたまふ声さへ、例の、人にことなり」(花宴1 三五三頁)と、常に中将であった。したがって、桐壺帝の讓位後であると告げる葵卷冒頭で、光源氏が既に大将であったのも、それなりに印象に残っているべきことだったと考える良いだろう。

その葵卷で夕霧が生まれる。だから、この時点で光源氏が二十一歳か二十二歳であるということ、指折り数えなくても辻褃が合うことだと言つて良い。また、この夕霧の出生に六条御息所が絡んでいたことは、その生霊の出現という劇的な展開があった以上、忘れる方が無理というものである。同時に、次の賢木巻で六条御息所が三十歳と語られるのが、その翌年であることも見やすいところであろう。葵卷では彼女が生霊となるきっかけとなった車争いの後に初夏の葵祭があり、また、葵上の死後の紫上との新枕に初冬の亥子餅が絡むなど、季節と結びついた行事が節目

節目に出てくる。六条御息所の伊勢下向が秋であることも印象的であろうから、ここでの光源氏は年が明けて二十二歳か二十三歳になっている。年立を持ち出さなくても、ここまでではごく自然に導き出されるのである。

そして、ここまで導き出されれば、もう十分であろう。六条御息所が前坊が皇太弟でいる間に入内したとするためには、最低でも光源氏が五歳の時に十六歳でなければならなかった。歳の差は十一歳以上である。なのに、夕霧の年齢を座標軸として過往を振り返ってみると、六条御息所と光源氏との歳の差は最大でも八歳ということにならざるをえない。ここに至って、六条御息所の入内が朱雀の立坊以前であったという可能性は、完全に否定されたことになる。利那の誤読は、利那のうちに消え去ったのである。

だが、ここで考えたいのは、誤読と確定したことによって、その誤読の連鎖が残したかもしれない印象までもが退けられたことになるのか、ということである。例えば本稿では、皇太弟への入内に、磐石の左大臣・右大臣の体制に対する、六条御息所の父大臣の賭けを読み取ろうとしてきた。それは、退位後の入内だとしたら、まったく成り立たないことだったのか。桐壺巻の叙述を、もう一度振り返ってみよう。

年月にそへて、御息所の御事を思し忘るるをりなし。

慰むやと、さるべき人々参らせたまへど、なずらひに思さるるだにいとかたき世かなと、疎ましうのみよるづに思しなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします、母后世になくかしづききこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕に伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそいとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむごろに聞こえさせたまひけり。

(桐壺Ⅰ 四一—四二頁)

藤壺宮の入内のきっかけを語っていく場面であるが、注意したいのは、その前提として言われている内容である。桐壺帝は依然として桐壺更衣のことが忘れられないのだと言う。だから、その代わりとなるような女性はいないか、「さるべき人々」を参内させているのだと言う。桐壺帝の思いの深さを示すものとしては何の不都合もない。だが、

入内を考えるような適齡期の娘を抱えた大臣の目からはどう映ったであろうか。

桐壺帝が求めているのは、あくまで亡き更衣の身代わりなのであり、それは、大臣家の入内に賭ける思いに応えられるような状態とは、到底見えなかつたのではないか。むしろ、一応は立ち直つているとは言え、更衣への思いを引きずつてゐる姿には、かえつてつけ入る隙があると考えたとしても不思議はない。

もとより、この時点でなら、既に春宮となつてゐる朱雀の元も入内先としては考えられる。だが、右大臣が左大臣の長女を入内させることを望んでゐることが明らかになつたそれは左大臣・右大臣の体制への逆転を狙う父大臣にとつては選択肢になりにくかつたとも想像できる。それどころか、その盤石の体制をいっそう強化しようとする右大臣の意思の中にあつて、失敗した入内の実例こそが、若菜上巻の冒頭に語られる、女三宮の母・藤壺女御であつたと言えよう。刹那の誤読の中に明滅してゐた、前坊への入内に一縷の望みをつないできた六条御息所の父大臣の無念は、その誤読が確定したことと引き換えに、かえつて明確に物語世界の中に引き継がれようとしてゐるとも言えそうに思ふ。

いや。少し話を端折り過ぎただらうか。父大臣の無念と

言つたが、言うまでもなく、彼の孫娘の齋宮は、今や秋好中宮と呼ばれる地位にある。それを後見役として支えているのは光源氏だ。この関係自体は、前坊の存在をどのように読み取るうとも崩れることはない。だから、父大臣の無念自体は、既に光源氏によつて晴らされてゐるとも言える。ただ、強調しておきたいのは、それは刹那の誤読に見てきたような、密接な関係ではなくなつてゐるということだ。

六条御息所の年齢が三十歳と示された時、彼女の入内と挫折は、光源氏の立坊断念と表裏の関係にあるかのように誤読される余地が残されてゐた。そして、そう誤読すればこそ、帝位にのぼることのなかつた光源氏が、齋宮の後見役となることで六条御息所の邸を實質的に伝領し、そこに六条院世界という宮中に比肩するような理想郷を實現していくことに、彼の本質的な王者性が対比的に感じ取られるという構図が垣間見えてゐたのではないのか。だが、その関係が誤読として雲散霧消した今、光源氏の榮華と秋好中宮の後位とは、単なる持ちつ持たれつとの関係でしかない。王者性などという言葉で説明するのは無縁の、政治的な成功へと矮小化されつつあるのではないかと思ふのである。

実際、ここから先の帝位がどのように引き継がれていくとするのかは不透明である。冷泉帝の在位中、秋好中宮

の立場は安泰であろう。だが、次を担う春宮には光源氏の長女が入内して、彼女が皇子を産んだならば、その皇子がさらに次の春宮候補となるであろう。その時、秋好中宮には子供はいないままなのか。いなくても、彼女を支える人物は後に残っていくのか。子供がいたとしたら、どうなるのか。光源氏や明石君や紫上はその時、誰の味方をするのか。

言い換えるなら、刹那の誤読の連鎖という、前坊をめぐる仮想の物語によって、齋宮・明石君・紫上が三位一体となるかのように切り拓かれてきた六条院世界の理想性と、そこに君臨してきた光源氏の王者性とは、その仮想の物語を失ったことで、改めて彼女たちを繋ぎ止める別個の論理を求められるに至っていると感じられる。女三宮の降嫁によって光源氏と紫上との関係に動揺が走るのも、明石姫君の出産という六条院にとつての慶事が明石入道の側の論理から説明されようとするのも、同様であろう。

刹那の誤読の連鎖は、光源氏の罪を問わぬまま彼を栄華に押し上げていく迂回路であった。だが、その迂回路が用意されていたことで逆に、光源氏は栄華の根柢を失ったのではないだろうか。罪を償った結果の栄華なら、そこに何の問題もない。だが、彼は罪を償う機会を回避したまま栄華にたどり着いた。ならば、栄華の根柢をどう手練り寄せ

なおすことが出来るのか。手練り寄せようとするところこそが、この物語の次なる課題となるうとしていないのではないのか。

けだし、第一部と呼ばれる、光源氏の年齢が明かされるまでの物語は、第二部以降の世界によって単純に否定されるだけの物語ではないのであろう。それよりも、第二部以降を着々と準備する物語でもあった方が良いのではないかと思う。賢木巻における三十歳という六条御息所の年齢は、そうした中、彼女が生霊となり死霊となって物語世界を跋扈するのと同じくらいに、年立という俯瞰的な設定と共鳴しながら、光源氏と彼の六条院世界を揺さぶる因子として、したたかに仕掛けられた表現だったのである。かっただかと思うのである。

注

- (1) 拙稿「紫上の年齢―表現方法としての源氏物語年立―」『常葉国文』第35号 令2・12)
- (2) 源氏物語本文の引用、および巻数・頁は、小学館新編日本古典文学全集により、私に傍線を付した。
- (3) 多屋頼俊『源氏物語の思想』(昭27 法蔵館)、望月郁子『源氏物語は読めているのか』(平14 笠間書院)等

- (4) 藤村潔『源氏物語の構造 二』(昭46 赤尾照文堂)、
坂本昇『源氏物語構想論』昭56 明治書院)等
- (5) 大朝雄二『源氏物語正篇の研究』(昭和50 桜楓社)、
森一郎『源氏物語作中人物論』(昭54 笠間書院)、濱橋
顕一『源氏物語論考』(平9 笠間書院)等
- (6) 多屋頼俊『源氏物語の思想』176―178頁の指摘

